

晩冬

目を閉じて血の色は強く
なお立ちつくして、花は
香りなく、疲れ果てた微風に
揺れもせず、空漠たるこの時を咲く

我は逝く、ともかくも逝く
荒み果てた魂として、陽光の下より
逃れむがため、我は逝く
今や、我は暗闇の子なれば

岬より吹く嘆きの牧笛はかすれ
次々と押し寄せる白い波に存在を
削り取られ、行き止まりの曇天が
果てしなく、春を手招きするのみ

媚薬に蝕まれ、放浪いの運命を
振り払うことかなわず、もはや
倦じ果てつつも、なお
生き永らえねばならぬ

春近し、我が哀しみの春は近し
憧れに憔悴し、幸福の横を通り過ぎ
陽光を地下室の小窓より眺め暮らし・・・
ああ、我の息ひそめる春ぞ近し

(1985.2.23)